平成３０年度

病害虫発生予報　第１号（４月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

＜予報の概要＞

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ	並 並	野菜全般	灰色かび病 アザミウマ類	並 並
タマネギ	白色疫病 べと病	少 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 ミカンハダニ	並 並 並
エンドウ	褐斑病、褐紋病 うどんこ病	並 やや少	カキ	うどんこ病	並
キャベツ	コナガ	並	ウメ	かいよう病	やや多
キュウリ	べと病 褐斑病	やや少 並	果樹全般	カメムシ類	多

気象予報

１か月予報（予報期間３月24日～４月23日　大阪管区気象台）

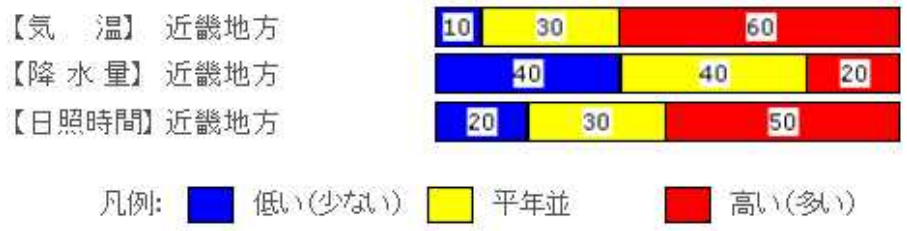
＜予想される向こう１か月の天候＞

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう１か月の平均気温は、高い確率60％です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40％です。日照時間は、多い確率50％です。

週別の気温は、１週目は、高い確率80％です。２週目は、高い確率50％です。３～４週目は、平年並または高い確率ともに40％です。

＜向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞



	月平均気温（平年値）（℃）	月降水量　（平年値）（mm）
４　月	和歌山　１４．９	和歌山　１００．３
	潮　岬　１５．６	潮　岬　２１２．７

Ⅰ．水　　稲

１．ヒメトビウンカ

（１）予報内容　　発生時期　並
　　発生量　　並

（２）予報の根拠

①　３月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市5.3頭、成虫率57％（平年12.5頭、成虫率45％）、紀の川市4.3頭、成虫率35％（平年9.2頭、成虫率32％）、かつらぎ町0.8頭（平年5.4頭）であった。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　ヒメトビウンカは、イネ縞葉枯病ウイルスを媒介する。イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、休閑田や雑草地付近での育苗を避ける。

②　は種時(覆土前)～ 移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。

③　田植え前から作期を通して、ヒメトビウンカの生息場所となる水田周辺雑草の除草管理を徹底する。

２．ツマグロヨコバイ

（１）予報内容　　発生時期　並
　　発生量　　並

（２）予報の根拠

①　３月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市 2.8頭、成虫率64％（平年3.6頭、成虫率48％）、紀の川市0.3頭（平年1.1頭）、かつらぎ町47.8頭、成虫率12％（平年13.9頭、成虫率50％）であった。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　は種時(覆土前)～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。

Ⅱ．野　　菜

＜タマネギ＞

１．白色疫病

（１）予報内容　　発生量　少

（２）予報の根拠

①　県北部での３月中旬の発生ほ場率は２％（平年27％）、発病株率は0.01％（過去７年の平均3.7％）であった。

②　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　同一のほ場内でも発病に偏りがみられることがあるので、ほ場全体を見回り発病が集中しているところは特に丁寧に薬剤散布を行う。

②　排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。

２．べと病

（１）予報内容　　発生量　並

（２）予報の根拠

①　県北部での３月中旬の越年罹病株の発生ほ場率は９％（平年６％）、新病斑の発生ほ場率は２％（平年６％）であった。

②　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　前年の発生が多かったほ場では本年も発生しやすい。

②　発生が認められたほ場では直ちに発病株や発病部位を除去し、ほ場から持ち出して適切に処分した後、薬剤散布を行う。

③　発病が認められないほ場でも周辺からの二次伝染が予想されるため、７

～10日間隔で予防散布を行う。

＜エンドウ＞

１．褐斑病、褐紋病

（１）予報内容　　発生量　並

（２）予報の根拠

①　県中部の露地栽培における３月中旬の発生ほ場率は50％（平年29％）、発病葉率は1.9％（過去９年の平均2.7％）であった。

②　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　雨が多いと多発するので薬剤散布は早めに行う。

②　多湿条件で発病が助長されるので、排水対策や通風対策に努める。

２．うどんこ病

（１）予報内容　　発生量　やや少

（２）予報の根拠

①　県中部の露地栽培での３月中旬の発生ほ場率は０％（平年４％）であった。

②　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　発生初期から薬剤防除を行う。

＜キャベツ＞

１．コナガ

（１）予報内容　　発生量　並

（２）予報の根拠

①　県北部での３月中旬の発生ほ場率は０％（平年：発生ほ場率３％、１株当たり発生密度0.01頭）であった。

②　フェロモントラップによる３月１～20日の誘殺数は、紀の川市６頭（平年9.5頭）、和歌山市33頭（過去６年の平均10.0頭）であった。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　ジアミド系、ＩＧＲ剤などの薬剤は殺虫効果の低下が認められている。

②　薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

＜キュウリ＞

１．べと病

（１）予報内容　　発生量　やや少

（２）予報の根拠

①　県中部での３月中旬の発生ほ場率は９％（過去８年の平均27％）、発病葉率は0.1％（過去８年の平均3.6％）であった。

②　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。

②　病原菌は気孔から侵入するので、薬液は葉の表裏にムラなくかかるように散布する。

③　肥効が低下したり草勢が衰えたりすると発病が助長されるので、適切な肥培管理に努める。

④　薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

２．褐斑病

（１）予報内容　　発生量　並

（２）予報の根拠
①　県中部での３月中旬の発生ほ場率は46％（過去４年の平均41％）、発病葉率は1.8％（過去４年の平均8.2％）であった。
②　４月の気象予報による。
（３）防除上考慮すべき諸点
①　多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。
②　薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

＜野菜全般＞

１．灰色かび病

（１）予報内容　　発生量　並
（２）予報の根拠
①　県中部の施設栽培キュウリでの３月中旬の発生ほ場率は０％（平年２％）であった。
②　県中部の施設栽培ミニトマトでの３月中旬の発生ほ場率は10％（過去２年の平均９％）であった。
③　４月の気象予報による。
（３）防除上考慮すべき諸点
①　施設内では湿度低下を図り、過潅水や滞水しないように注意する。
②　発病部位を除去し、発病初期から薬剤防除を行う。
③　薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

２．アザミウマ類

（１）予報内容　　発生量　並
（２）予報の根拠
①　県北部の施設栽培イチゴでの３月中旬の発生ほ場率は、ヒラズハナアザミウマ０％（前年０％）、ミカンキイロアザミウマ０％（平年０％）であった。
②　県中部の施設栽培キュウリでの３月中旬の発生ほ場率は、ミナミキイロアザミウマ９％（過去４年の平均28％）、ミカンキイロアザミウマ９％（過去４年の平均３％）であった。
（３）防除上考慮すべき諸点
①　気温の上昇とともに発生が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。

Ⅲ．果　　樹

＜カンキツ＞

１．かいよう病

（１）予報内容　　初発日　５月16～25日（並）
　　発生量　並
（２）予報の根拠
①　予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の越冬病斑の発病葉率は2.0％（平年12.1％）であった。
②　前年10月中旬の春葉発病の発生園率は17％(平年16％）、発病葉率は0.6％（平年0.6％）であった。
③　４月の気象予報による。
（３）防除上考慮すべき諸点
①　罹病性品種や常発園では、罹病枝葉の剪除とともに防風施設の整備に努める。
②　発芽前の薬剤防除ができなかった園では、新梢伸長期に銅水和剤（薬害

軽減のための措置を講じる）を散布する。

2．そうか病

（１）予報内容　　発生時期　並
　　発生量　　並

（２）予報の根拠

①　前年10月中旬のウンシュウミカンにおける果実発病の発生園率は６％（平年４％）であった。

②　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　常発園および前年多発園では、越冬病斑の除去、発芽直後の薬剤防除に努める。

3．ミカンハダニ

（１）予報内容　　発生量　並

（２）予報の根拠

①　予察ほ場（無防除、有田川町奥）における３月中旬の発生葉率は０％（平年０％）で、マシン油乳剤を散布している慣行防除区における発生葉率は０％（平年０％）であった。

②　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　殺ダニ剤に対する抵抗性の発達が問題となるため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

＜カ　　キ＞

1．うどんこ病

（１）予報内容　　発生量　並

（２）予報の根拠

①　前年10月中旬の「富有」の発生園率は77％（平年87％）、発病葉率は14.5％（平年28.8％）であった。

②　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　子のう胞子飛散最盛期は４月下旬～５月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発した園では、この時期の防除を徹底する。

②　４～５月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。

③　病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬液は葉裏をねらって丁寧に散布する。

＜ウ　　メ＞

1．かいよう病

（１）予報内容　　発生量　やや多

（２）予報の根拠

①　３月上旬の予察ほ場（無防除、みなべ町東本庄）での２年生枝の潜伏越冬病斑形成枝率は2.4％（前年０％）であった。

②　県南部（みなべ町、田辺市）の前年６月上旬の発生ほ場率は74％(平年53％)、発病果率は5.2％(平年2.8％）であった。前年秋期の気象条件と併せて潜伏越冬病斑量は平年よりやや多いと考えられる。

③　４月の気象予報による。

（３）防除上考慮すべき諸点

①　強風雨により感染が助長されるため、常発園では防風施設の整備等の防風対策を励行する。

② 生育期の薬剤防除は、発芽期からほぼ10日おきに数回、抗生物質剤を散布する。強風雨直前の散布で、より高い効果が得られる。

＜果樹全般＞

１．カメムシ類

（１）予報内容　　発生量　多

（２）予報の根拠

① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり1.5頭（前年０頭、平年0.5頭）、捕獲地点率は61.7％（前年０％、平年19.0％）であった。

② 県南部（みなべ町東本庄）の予察灯での昨年10月の誘殺数は、チャバネアオカメムシが3,666頭（前年11頭、過去７年平均1,105頭）、ツヤアオカメムシが43,191頭（前年422頭、過去７年平均4,645頭）であった。

県中部（有田川町奥）の予察灯での昨年10月の誘殺数は、チャバネアオカメムシが569頭（前年46頭、過去３年平均97頭）、ツヤアオカメムシが2,888頭（前年177頭、過去３年平均188頭）であった。

県北部（紀の川市粉河）の予察灯での昨年10月の誘殺数は、チャバネアオカメムシが839頭（前年161頭、平年52頭）、ツヤアオカメムシが1,688頭（前年425頭、平年172頭）であった。

③ 紀中、紀南地域では越冬期に防風樹や中晩柑園において、ツヤアオカメムシが多く認められた。

（３）防除上考慮すべき諸点

① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

② ウメ・モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。

③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。

④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害が認められた場合は薬剤による防除を行う。

⑤ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病害虫防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、ＪＡ等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ　〈農作物病害虫防除所〉
https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html

○和歌山県ホームページ　〈わかやま県政ニュース〉
http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/

※詳しくは、農作物病害虫防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き
本所（紀の川市、農業試験場内）　TEL 0736-64-2300

カンキツ
有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）　TEL 0737-52-4320

カキ、モモ
紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）　TEL 0736-73-2274

ウメ
みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）　TEL 0739-74-3780